

## Pay it forward

MCR15 期 医療疫学分野 専門職学位課程 山本 基佳

### 大学院生活のはじまり

長野県松本市の病院で長く救急医をしていた私は、10 数年目に京都大学 MCR コースの存在を知った。そして大学院生活が始まったのが 2019 年 4 月のこと。この年は年号が平成から令和に変わった記念すべき年だ。大学院生活が始まったこの年、私はふたつのことに感謝した。ひとつは教育を受けられることへの感謝、もうひとつは親への感謝である。

まず 1 点目、教育を受けられることへの感謝について。これまでの教育歴を振り返ると、高校や大学で受験や進級などその時々々の困難はあったものの、受け身で教育を受けてきた感が否めない。しかし、社会人経験後の大学院教育はそうではなかった。義務や強制ではなく、学びたいことを学べる。医療者として社会に出てから生じた疑問点を能動的に学べることは楽しいことであり、幸せなことだった。

次に 2 点目の親への感謝について。前述のように、私はこれまではごく普通に、ごく自然に、周囲と同じように教育を受けてきた。このときは教育を受けられる喜びを今ほどはわかっていなかったように思う。学費を出してもらっていたことも、当然とまではいわないが、そのありがたみを十分にわかっていなかった。社会に出て、自分で自分のために学費を払うようになり、はじめてそのありがたみが身に染み、親への感謝の気持ちを深めた。

### 仲間と過ごした授業・実習・グループワーク

大学院の授業や実習で、これまでの医療者として培った経験や知識がひっくり返された。「統計的有意という言葉は使用してはいけない」、「外的妥当性よりもまずは内的妥当性の担保が重要である」、「データを収集後に統計家に相談するのは、確定診断のために死体解剖を依頼するようなもの」などなど。MCR コースで勉強をした今となってはどれも常識となったが、当時はこんなこともわからずに医療を 10 年以上も続けていた自分の無知を恥じた。

授業はその内容も教育方法もレベルが高く、つまらない授業がなかった。どの先生も難しいことをわかりやすく、興味を持つように教えてくれた。とある同期が、「すべての授業が予備校のカリスマ講師の授業のよう」とたとえていたが、的を射る表現だと思った。

グループワークが多いのも特徴だった。コースや教室の垣根を越えて、次の授業までの課題に複数名で取り組んだ。そのときに同期の学生たちが多種多様な

背景を持って大学院に来ていることを知った。様々な年代、様々な職種、様々な背景のメンバーが共通の課題に取り組むと、思いもよらない新鮮な意見が出てくることもあり勉強になった。お互い採点をし合ったり、優秀なグループが表彰されたりするのも京大ならではの授業の特徴ではないかと思う。また、この年になって信頼できる仲間が新たにできるとは思わなかった。同じ志のもと、同じ困難を乗り越え、同じ釜の飯を食ったからこそ、親密になれたのだと思う。

臨床研究計画法(通称プロマネ)の授業では、自分の研究のプロトコールを十数人の教員の先生方と同期の前で発表し、質疑応答を行った。同期の発表のレベルは高く、秀逸なテーマ、十分な先行文献の評価、練られた研究デザインなどに、同期として感嘆した。しかしそんな同期の優れたプロトコールも教員の先生方の前では、まだまだ伸びしろのあるプロトコールであったようだ。頑強と思われたプロトコールも教員の先生方の鋭い指摘の前には崩れ落ちてしまう。また、回によっては議論されていることのレベルが高すぎて自分の理解が追いつかないことも少なくなかったが、それがモチベーションにつながった。発表が終わると、次回までにそこをブラッシュアップすることで、研究を練り上げていくのである。プロマネに参加した誰もが感じたと思うが、多分野の権威ある先生方から直接生で指導を受けられる、こんな貴重な機会はほかではないだろう。

#### 平日の様子

入学時、「授業と課題で追われる。かなり忙しいから覚悟した方がよい」、「バイトは禁止ではないけど、忙しくてバイトする時間はとれないと思うよ」などと前情報を聞いていた。私は、「自分は救急医だからマルチタスクはいつもしているし、臨床のとき以上に忙しいなんてことは流石にないだろう」と高をくくっていたが、その考えは甘かった。常に複数の課題やノルマを抱えることになり、「よし。今日は2個終わった」と思っても、その日のうちに3個の課題が出て、げんなりするということはしょっちゅうだ。終わりや正解のない課題もあったため、知識や実力に乏しかった自分は、喫茶店に深夜までこもってレポートに取り組むなどということも日常だった。それでも To do リストを駆使しながら、複数の授業の課題やグループワークの集まりに毎日取り組んでいけたのは、仲間がいたからだと思った。

#### 休日の様子

前期は土日が授業フリーで、後期は平日にも空き時間ができることがあった。家庭の事情で週末に松本や川崎に行かなければならなかった私は、移動中の新幹線や特急電車が貴重な勉強時間になった(乗り物酔いの体質がなかったのが幸いした)。学生なので、休もうと思えばいくらでも休めたが、やりすぎるとし

わ寄せがくるので注意が必要だ。

年間を通して

「光陰矢のごとし」とはまさにこのことだ。あっという間の1年間。本当に充実した1年だった。すべてがおもしろく、授業を聞いて鳥肌が立ったのは久しぶりだった。履修単位の取得上限があること、履修要件にしぼりがあることが非常に悔やまれた。しかし時間は有限であるし、いざまとまった時間が取れても人はさぼりやすいというのも事実だろう。MCR コース 10 数年の歴史の中で、先人の方たちの意見によって少しずつ改善された結果、今のちょうどよい負荷のMCR コースプログラムがあるのだと思う。私たちの経験も次世代へとつながり、“Pay it forward” として、少しでも未来の礎となれば幸いである。